



TITLE:

天文時評

AUTHOR(S):

---

CITATION:

天文時評. 天界 1926, 6(64): 254-254

ISSUE DATE:

1926-04-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160518>

RIGHT:

# 天 文 時 評

## 太陽の黒點が肉眼でも見える

(三月七日大阪朝日朝刊)

京大の天文學者山本一清氏の發表するところによれば、近ごろ太陽面の黒點はますます明瞭となり、立派にわれわれの肉眼でも見られる、多分今週中は同様見えるであらう。

評——去る二月二十五日太陽東邊に現はれた黒點群(三澤氏の第385群)が、三月に入つて太陽の中央子午線に近づくと共に頗る大きな形になつて來た。三月二日午後五時頃、京都大學の山本上島其他の諸氏は之れを日没前に肉眼でも見た。それで山本氏は此の事をニュースとして大阪放送局へはがきに書き送つたものである。大阪朝日が之れを七日の朝刊に出した時には既に此の黒點群は可なり西へ移つて了つてゐた。

## お星さんが晝間見えた

(三月十七日大阪毎日新聞夕刊)

十七日正午頃から午後一時頃にかけて太陽の近くに星のまたゝくのが發見されたが白晝しかも強い太陽の光の中に星の見えるのは珍しいことなのでいづれも不思議に感じて大騒ぎをやつてゐた東京天文臺について尋ねる。

評——それは決して不思議なことではなく星は金星で平常は太陽の光に消されてゐるが、今は金星が非常に光度を増してゐるので太陽の光に打勝つた譯だ、年々一度は金星が光度を頂點まで發散する今年は三月十四日がその光度の高い日であつたが十七日は空が晴れたのでよく見えた譯である。

## 地球自轉緩む

(三月十七日大阪毎日夕刊)

シカゴ大學のブラウン教授は多年の實驗により地軸を中心とする地球の自轉は漸次緩慢になつて行くがそれは全く氣につかぬ程のもので百年に約十分の一秒の割合である最近廿年間の計算

による此の原因は潮の干満による磨擦から起こるのでこの中心地點はペーリング海峡であることを發表した。

評——地球の自轉が緩むか速まるかは天文學上興味ある問題である。多くの學者が實測的にも數理的にも研究してゐるが、大體に於いて未決定となつてゐる。實測的と言へば日食や月蝕の記録を精密に調査研究するのであるが、此の方面から今までに確證は得られてゐない數理的には、地球が收縮して行くため自轉は速くなるといふ理論と、月との潮汐關係のため自轉は緩くなるといふ理論とが共に成立するのであるが、結局何れが重要なものであるか分らない。此の記事は、多分潮汐問題の研究結果の發表であるらしい。しかし左様なれば要するに數理上の結論である。實測學派の人々が承認しない限り、餘り早合點ばつゝしなければならぬ。

## 通 信

山本先生

(前略) 丁度十四日に日食が有るために、十四日までは家から通學致して居りました。

(中略) 天界一月號と東京天文臺の本曆によりまして日食の時期を豫知致しました。

私は、早速、寫眞の三脚に双眼鏡(12倍)を取付けました。そして太陽の像を投影する白紙板を用意し餘計な光線を避けるplateを作りました。それから大阪の大會の時上田先生の御講演noteより見出しまして、烟ガラスを作りました専門的な準備は出来ませんがこれ位準備しておきました。愈<sup>14</sup>日が参りました。クロノメーターが有りませんでしたから學校の歸へり道に大阪中央郵便局で最も正確と思はれる程度に時計を合はせました。歸宅後再び郵便局に時間をお合はせました。

天文學を知らない母や弟、續いて妹までが二階のヴェランダへ登つて來ました。さあ今か今かと思つてゐるさ16時21分4心持缺けた様になりました。父は私の作つた烟ガラスでしきりに見てゐます。私は白板に太陽の像を投射致しました。すんずんさ缺けて参ります母は「何うして天文學者はこの時間を少しの間違ひなしに豫知し得るのか？」等と問ひます。そこへ姉までやつて参りまして大さくきて御用いしました。幸にも一點の曇りもなき青空に不完全ながら觀測して4時55分には太陽は西の靄の中にかくれてしまひました。

(後略)

小泉功